

## 特別記念講演 生物と無生物のあいだ

2018 年 9 月 23 日 (日) 11:00-12:00 第 1 会場 | 石川県立音楽堂 2F コンサートホール

座長：中森 慶滋 (公益社団法人石川県薬剤師会 会長)

### 生物と無生物のあいだ

福岡 伸一<sup>1</sup>

1:青山学院大学総合文化政策学部 教授 [東京都]



現在、私たちの周りには生命操作を巡る様々な議論がある。遺伝子組み換え、クローン技術、iPS 細胞、臓器移植……。これらを可能とする先端技術の通奏低音には、「生命とはマイクロな部品が集まってできたプラモデルである」という見方、すなわち機械論的生命観がある。

ルドルフ・シェーンハイマーは、生命が「動的な平衡状態」にあることを最初に示した科学者だった。私たちが食べたものの分子は、身体を構成する分子と絶え間なく交換されつづけている。つまり生命とはプラモデルのような静的なパーツからなりたっている分子機械ではなく、パーツ自体のダイナミックな流れの中に成り立っている効果そのものなのである。

さらに「動的平衡」は、建築や都市など人工物のあり方、あるいは人間の組織論にも応用して考えることができる。

この「動的平衡」論をもとに、生命とは何かを改めて考察してみたい。

#### 【略歴】

生物学者。1959 年東京生まれ。京都大学卒。米国ハーバード大学医学部博士研究員、京都大学助教授などを経て青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員教授。サントリー学芸賞を受賞し、80 万部を超えるベストセラーとなった『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）、『動的平衡』（木楽舎）など、“生命とは何か”を動的平衡論から問い直した著作を数多く発表。ほかに『世界は分けてもわからない』（講談社現代新書）、『できそこないの男たち』（光文社新書）、『生命の逆襲』（朝日新聞出版）、『せいめいのはなし』（新潮社）、『変わらないために変わり続ける』（文藝春秋）、『福岡ハカセの本棚』（メディアファクトリー）など。対談集に『動的平衡ダイアログ』（木楽舎）『センス・オブ・ワンダーを探して』（だいわ文庫）、翻訳に『ドリトル先生航海記』（新潮社）『生命に部分はない』（講談社現代新書）などがある。近刊に『新版 動的平衡』（小学館新書）、『福岡伸一、西田哲学を読む—生命をめぐる思索の旅 動的平衡と絶対矛盾的自己同一』（明石書店）。

また、大のフェルメール好きとしても知られ、世界中に散らばるフェルメールの全作品を巡った旅の紀行『フェルメール 光の王国』（木楽舎）、朽木ゆり子氏との共著『深読みフェルメール』（朝日新書）を上梓。最新のデジタル印刷技術によってリ・クリエイト（再創造）したフェルメール全作品を展示する「フェルメール・センター銀座」の監修および、館長もつとめた。

2015 年 11 月からは、読書のあり方を問い直す「福岡伸一の知恵の学校」をスタートさせ、校長をつとめている。